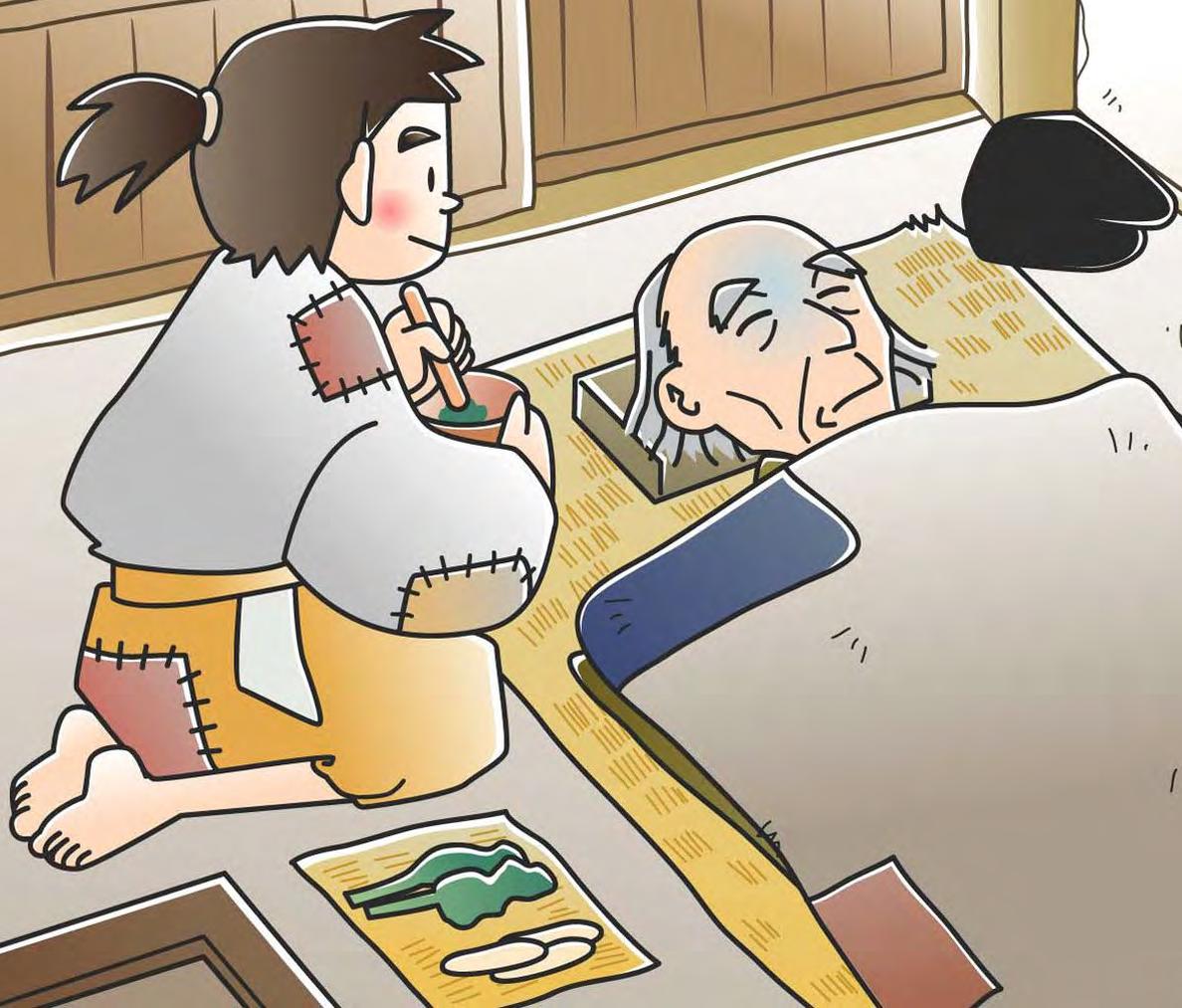


むかし、新倉のあたりに

一軒の貧しい農家がありました。

その農家には、年老いて寝たきりの父親と、
二十歳くらいの若者が住んでいて、
細々と生活をしていました。





若者は食事の世話から野良仕事まで、
朝は暗いうちから
夕は星が出るまで働いて、
お父さんの面倒を見ていました。

ある夏のことです。その日は朝から暑く、
地上の草木は暑さですっかりなえていました。

若者は、その日もたきぎを取りに

山に登っていました。



たき木を背負い、

山をおりようとすると、

ふと近くに清水の湧く音が聞こえてきました。

その場所まで行ってみると、
こんこんときれいな水が湧き出していました。
飲んでみるととても冷たく、
その場にいることを忘れてしまうようでした。

若者は、持っていた竹筒に水を汲み取り、
お父さんに飲ませてあげることになりました。



帰宅してからお父さんに飲ませてあげると、
なんとびっくり。水はお酒に変わっていました。
お父さんはとても喜びました。

その後も、若者は毎日のように山へ行っは、
その水を汲み取ってお父さんにあげ、
お父さんを喜ばせてあげたということです。

